庄内地方元禄期一民家の建築技法について

ARCHITECTURAL TECHNIQUES EMPLOYED IN A FARMHOUSE OF THE SHOUNAI REGION FROM THE GENROKU PERIOD

御船達雄 ——*1

キーワード：
庄内地方, 近世民家, 継手・仕口

Keywords：
Shounai region, Edo era farmhouse, Wood joints

Tatsuo MIFUNE ——*1

This paper focuses on characteristics of architectural techniques employed in the construction of the Sakakibara Family Residence in Yuza-cho, Yamagata Prefecture. The farmhouse built in the third year of Genroku Period (1703) is one of the oldest extant residences in the prefecture. Surveys were made while the structure was undergoing restoration, involving reconstruction of lost parts.

Details of the original part of the structure built in the early 18th century and the guestroom rebuilt in the first half of the 19th century were compared, to reveal the development of architectural techniques used in residential architecture in the Edo Era.

1. はじめに

歴史的建造物の継手・仕口に代表される技法については、寺社建築では『文化財建造物伝統技法集成』¹に見るような成果があるが、こと民家にいたっては集成的な成果は少なく、その変遷過程や地域性の解明は、今後の大きな課題といえよう。ところで17世紀後期から18世紀初期は、東北地方は「近世民家」の成立期であると考えられており²、この期の建築技法は東北地方近世民家成立期の構造や技法を位置づけするのに、一つの重要な画期であると思われる。

山形県遊佐町に所在する旧榊原家住宅は、元禄16年(1703)に建てられたと伝承される民家で、建築当初は中門造であった建物である。保存のために解体・保管されていたが、現在復原工事を行っている。筆者は一連の調査を担当し、つぶさにその技法を調べる機会を得た³。民家の場合、技法の時代性を検討するさいに、地域性が問題となって他との比較が容易でない場合があるが、この住宅では、座敷部分が江戸時代後期に建て替えられたことで、建築当初とその後の時代の比較検討が可能な好個の事例となっている。

本稿ではこの榊原家を一事例として、庄内地方における近世民家成立期の技法を報告するものである。この作業は、より精緻な編年指標の確立にも結びつくものと考えられ、また民家史研究を深化させる基礎的な作業でもある。

2. 榊原家とその建物の概要

旧榊原家住宅は庄内地方の北辺である山形県飽海郡遊佐町の平津地区に所在した家である。屋敷と建物はもと大組頭齊藤家のものであったのを、明治40年頃に榊原家に移り住んだ。庄内藩において

大組頭は、大庄屋の下にあって組内各村の肝煎を統括した要職で、近世農民では上層の家であった。住宅は四十七士の討ち入った翌年に建てられたと伝わっており、元禄16年(1703)になる。これは建築手法からも妥当であると考えられ、山形県域では重文・旧尾形家住宅と並ぶ現存最古級の民家である。住宅はその価値を認められ平成8年7月に遊佐町有形文化財に指定されたが、指定直後に榊原氏が家建てを替えるのにさいし町が建物を譲り受け、解体保存していた。6年を経たものの予算が付き、平成14年度に平津より東に約3km離れた杉沢地区で現在復原工事中⁴である。

建物は桁行11間、梁間5間、平屋建、寄棟造、茅葺屋根の農家である。痕跡より復した復原平面は、床上がチャノマを中心とした主要六室よりなるものであるが、座敷部分は江戸時代後期⁵に建て替えられており、当初の部屋の性格は不明な点が多い⁶。なお現状では建物は直屋であったが、座敷の正面側に中門があったことがわかっており⁷、下手に馬屋中門があった可能性も高く、当初は両中門造であったと見られる。組み立てに伴う調査で、ウチデドコが土座床であったことが新たに判明⁸した。

軸部構造はいわゆる四方下屋造で、上屋梁間3間半の先端を下屋繋ぎ梁の上に持ち出して支える形式である。柱の省略はなく、部屋境も原則として1間おきに柱が立つ。

以下では元禄期と見られる当初材を中心にして、その技法を江戸後期に建て替えられた座敷部と比較して報告したい。

3a. 軸組・小屋組の用い方

当初部分は柱が1間おきに立ち、部屋境桁行に頭繋ぎを入れ、そ

*1 鶴和歌山県文化財センター 技師・工修
(〒648-0064 橋本市橋本1-6-10)

*1 Center for Cultural Properties in Wakayama Prefecture, M. Eng.

の上に上屋梁を掛ける形式である。部屋の中央に当たる柱筋では桁行、梁間ともに差梁を入れる。大引は梁間方向に一間毎に入り、桁行は足固貫を入れる。貫は足固貫のほか、内法貫、飛貫が入り、それぞれ略鎌継で繋がる。以下に特徴的な部材を見ていく。

大引は野太付の 150 ミリ程の栗材で、上面をチョウナはつりして、根太の欠き込みをとる。根太は径 90 ミリほどの野太付の栗材である。大引上に載せて釘打されるが、大引上面と根太上面は 36 ミリの差ができる。これが江戸後期の座敷部では、桁行にも大引が入り、大引と根太の上面が揃う収まりになっている。座敷部の材種は、大引、根太ともに杉材である。

差梁は部屋の上を井桁状に結び、106×150 ミリ（幅×成、以下同）断面のブナ材で縦使いする。柱に大入ホゾ差しされ、鼻栓か込栓（場所で異なる）で留められる。断面は柱よりも細いもので、上部加重を受ける用い方ではなく、柱の繋ぎ材としての役割しかない。交差部は渡腮仕口が造られている。これが座敷部では、用い方に大きな差がないが、材種は松材、断面は 120×170 ミリで幅、成ともに若干大きい。また柱の取り付け仕口が大入ではなく、箱目違を造

るもので違いがある。座敷差梁の交差部は、当初と同様に渡腮を造るが、腮部分の断面寸法は大きくなっている。座敷部の差梁が交差する上には、束が建ち、上屋梁の加重を支える構造である。

頭繋ぎは 150×90 ミリのヒバ材⁹で平使いする。断面が小さな薄い材で、柱頭を繋ぐ役割しか持たされていない。継手は腰掛鎌継だが、注目されるのは鎌頭が台形状であることで、いわゆる中世鎌の形である。継手位置は柱真にきており、持ち出しにはなっていない。このような台形の頭になったのは、継手を持ち出しにせず、鎌に柱重ホゾ穴が開くためであろうが、それにしても古い形を保っている¹⁰といえよう。なお座敷部頭繋ぎは継手がなく、比較ができないが、断面は 150×120 ミリと成がやや大きなものとなっている。なお近隣の重要文化財旧青山家住宅主屋（明治 23 年建築）では、頭繋ぎは 170×190 ミリと大きく、縦使いしており、頭繋ぎというよりは、「桁行梁」というほうがふさわしい断面になっている。

上屋梁は 180×145 ミリのブナ材であり、これも断面は小さく平使いする。頭繋ぎ上に載り一間毎に梁間方向に掛かる。上面先端には合掌が入るホゾ穴が開けられている。座敷部の上屋梁は 2 通り分

図 1 現状平面図

図 3 チャノマ列梁間断面図（現状）

図 2 当初復原平面図

図 4 復原架構図（座敷部は江戸後期で作図）

写真 1 榊原家主屋外観（東より）

写真 2 座敷部差梁箱目違

写真 3 差梁渡腮 当初／江戸後期

あり、座敷部中央筋で 176×130 ミリの栗材で平使い、座敷・東縁境では 150×175 ミリの栗材で縦使いする。

合掌は 136×173 のブナ材で、縦使いである。合掌尻は良くあるように先端を鉛筆状に細めるのではなく、上屋梁に入るように傾ホゾを造り出したものである。上面には5カ所にダボ穴を空けて、ダボを打ち込んで、これで母屋の引っかかりを造っている。合掌合端はホゾ穴を空け、反対側の合掌とホゾ差しに組み合わせる。合掌列毎に向きが交互になるよう組む。なお合掌は、押角に丁寧に製材されており、ホゾの加工精度からみても明らかに大工仕事で造っている。

3b. 材種の区分

当初材の柱は、上屋、下屋ともにほとんどがヒバ材であったが、上屋柱座敷境の1本が杉材、土間柱の一部がブナ材、下屋柱の1本が栗材、と若干他の材種も混じる。桁梁類はブナ材が主であるが、チャノマ正面側入側の下屋繋ぎ梁には栗材も見られた。当初材はいずれも年輪が非常に密であり、持っただけでその重さで時代がわかるほどで、天然林木であると考えられる。

座敷改築時では、上屋柱は杉材である。下屋柱は栗材を使う。梁類は松材であった。年輪はあまり密ではなく、人工林木と思われる。

これから見ると、当初はヒバやブナ・栗を中心とした雑木、座敷改築時は杉と松が主であることがわかる。

図5 大引の納まり

図6 当初頭繋ぎの継手

3c. 柱ホゾの長さと面取り

当初柱の柱頭のホゾは重ホゾである。これは頭繋ぎと上屋梁に取り合うようになっているためである。下屋柱の重ホゾは繋ぎ梁と下屋桁と取り合う。面取りは上屋柱の場合、幅 145 ミリの柱で 8 ミリの面取 (十八面取)。下屋柱の場合で幅 127 ミリの柱で 6 ミリの面取 (二十面取) であった。この面取りは床高さまでしかとられておらず、床下は角のある状態で残されている。

これにたいし、座敷部柱は重ホゾであるものの、ホゾ先端は上屋梁上面まで貫通す長さがあり、当初柱とは異なる仕様になっている。これは下屋柱も同様である。また面取りは上屋柱の場合、幅 145 ミリの柱で 6 ミリの面取 (二十四面取)、下屋柱の場合は幅 120 ミリで面をとらない。上屋柱の面取りは床下まで通されて柱全体にとられており、これも当初柱とは異なっている。

3d. 壁の小舞

壁は竹が比較的少ない冷寒地であるためか、ヨシを小舞として使う。間渡しは細い丸竹を使用している。これを藁縄で編んで壁下地とする。ヨシは強度を出すため、二本づつ束にして使用している。この仕様は当初、江戸後期ともに共通するものであった。

注目したい技法として、小指ほどの大きさに楔状に造った竹釘を柱や貫に打ち込んで、これに間渡しを縄で結んでいる点がある¹¹⁾。

図7 軒の納まり

写真4 当初 頭繋ぎ継手

写真5 合掌下端の傾ホゾ

写真6 小舞をパネル状に造る (復原工事)

写真7 楔状の竹釘

図8 柱面取と重ホゾ

図9 当初柱の丸刃チョウナ痕

竹釘と取り合っている縄を外すと、パネル状に下地全体が外れることとなる。このようなプレビルド式ともいべき小舞の掻きかたは、当地の特徴であるらしく、昭和30年頃までは、左官が足場の下で小舞をパネル状に造り、それを足場に乗って取り付けていたという話を聞くことができた¹²。

3e. 軒の収まりと屋根

屋根は茅葺屋根であるが、当初の屋根下地は径60ミリの野太付の雑木であった。これにたいし座敷部や後の改造部分では、竹下地であり雑木は使っていなかった。

軒の収まりは、当初がこの雑木の垂木鼻を桁から1尺2寸ほど葺下ろして出すもので、垂木鼻先にはくびれを造って、茅負の留め縄が掛かるようにしている。

座敷部では東縁側部の軒が、せがい造になっており、その他の南面や北面は台輪軒であった。また背面側は当初部分であっても、軒先を切断し、桁上に茅負を打ちつけて、台輪軒に変更¹³してあった。

庄内では、せがい造や台輪軒がよく見るが、軒先を出すのは管見のかぎりなく、古い技法であると思われる。

3f. チョウナ加工痕

当初材は丸刃（蛤刃）のチョウナ加工が見られる。このほかに平刃のチョウナもある。使い分けの意図は定かではないが、併用されていたことが明らかであり、元禄期建築という伝承を裏付けるものでもある。

これにたいして江戸時代後期改築の座敷部分では、丸刃チョウナはなく、すべて平刃であった。それも当初に比べると刃幅が大きなものである。しかし梁類はこの平刃チョウナで非常にていねいにはつられており、天井がなかったこのときにも、化粧に近い意識で仕上工程に使っていたことがわかる。

4. まとめ—技法の位置するところ

本稿の意図するところは、榑原家の特徴的な技法の報告であるが、ここではその意味について若干の考察を加える。

旧榑原家住宅は、全体として見ると、建築当初と座敷改築時は約百年の隔りがあるのにも関わらず、構造体の造り方や、壁下地の造り方に連続性をみることができる。しかしいっぽうで、違いも目に付く。たとえば、梁類の断面の使い方、柱ホゾの重ホゾの長さ、軒の納め方、構成材種、である。これは建築年代の違いからくるもの、と理解するのが妥当と思われる。とくに梁の断面の使い方、や柱重ホゾは、構造的に未整備であったものが、江戸時代後期には整備される方向に変化したために、違いがあると考えられる。建築当初では、梁は上屋梁、頭繋ぎ、差梁ともに、上部構造を受けるような断面ではなく、柱の上部を相互に繋いだり、合掌が開かないようにしたりする、繋ぎ材、引張り材としての役割しか持たされていない。構造の考え方は、ウチデドコ、デドコ正面の差物を除くと、基本的に必要となる柱を立てて、上部加重を受け、あくまで梁はそれを相互に繋ぐものとして使われているのである。

柱重ホゾは、貫通さなくても十分に用が足りる。しかし当初柱は、上屋梁に1寸しかホゾ差しされないの、地震や台風で屋根に不圧がかかったときに、抜けてしまうおそれもある。こういった心配が

江戸後期の上屋梁を貫通す重ホゾには、ほとんどないのである。管見のかぎりでも、現存する庄内の江戸後期以降の民家では、重ホゾは梁上まで貫通するものばかりである。

近世民家の発展の方向性の一つとして、間仕切り間の柱を差鴨居や小屋梁で抜くようになるが、榑原家の建築当初では、柱を一間おきに立て、梁は構造体として大きな役割を果たしておらず、近世民家の発展過程でみると、古い形式を示していると考えられる。柱重ホゾが短い点、鎌継の頭が台形である点なども、近世以前の手法を伝えているものと推察できる。

以上で旧榑原家の特徴的な技法について報告したが、建築技法は地域性も大きく、大工の手による違いも当然あると考えられる。今後修理に伴う調査経過をまとめていくなかで、これらの技法を他地域も含めて位置づけていきたい。

¹ (財)文化財建造物保存技術協会編：文化財建造物伝統技法集成—継手及び仕ロー 上・下、同会刊行、昭和61年。

² 宮澤智士：日本列島民家史、住まいの図書館出版局、1989年、p.86、ほか

³ 解体工事は宮澤智士氏（長岡造形大学）の指導のもと、川村哲夫氏（匠建築事務所）が主任を務め、当時学生であった筆者はその主任補佐となって解体中の現場に常駐し、調査を行った。

⁴ 遊佐町杉沢の杉沢公民館分館敷地内。遊佐町の介護予防拠点施設整備事業の一環で、文化財として復原しながら、活用のために断熱気密工法もとる（工事指導 宮澤智士氏、設計監理（有）安井設計 安井妙子氏）。国指定民俗文化財「杉沢比山」と関連した活用も、町教委により検討中である。

⁵ 土台を用いない点や座敷・縁側境柱を省略しない点から、編年上18世紀後期から19世紀初期頃と考えられる。なおこの座敷改築に続き東側正面に増築されたゲンカンノヘヤの板壁から、文政年間の下貼文書が出ていることも参考になる。

⁶ 番付から桁行規模が桁行3間はあったことが確かで、柱の仕上等から接客用座敷であったと思われる。チャノモノヘヤ北東隅の柱には旧カミザシキの床框らしい目違痕跡も残されている。

⁷ 中門の意味については、御船達雄：中門造民家の17世紀における存在形態について、日本建築学会計画系論文集 第541号、2001年3月、で述べたことがある。

⁸ 根太割付位置や根太掘仕口の工作状況から判明。

⁹ 部材の現状での判断のため、ブナも混じっている可能性がある。

¹⁰ 隣の酒田市の町家、旧鍛屋（国史跡／江戸末期）では、これの修理に関わった大工から、主屋にこの台形鎌があったと聞いた。しかし筆者はこの継手を実見していない。なお、(財)文化財建造物保存技術協会編：史跡旧鍛屋保存修理工事報告書、酒田市教育委員会、平成10年、にその報告は見られない。庄内地方ではないが、鳥海山を隔てて所在する17世紀後期建築の重文・土田家住宅（秋田県）には、類似の鎌が使われている。

¹¹ 類似した竹釘は、重文若林家住宅（新潟県村上市）で使われていることが、修理工事報告書で報告され、そこではチクチョウと呼ばれている。またほかの報告では、越前や越中、加賀でもこのような竹釘を使用するという（谷卓郎「木舞下地土壁構法の地域性」『日本の壁』INA BOOKLET Vol.5 No.2、1985年）。このような報告を見ると、竹釘で小舞下地を留める構法は、日本海岸に点在するやりかたらしいが、榑原家では当初からの仕様であることが分かるので、少なくとも300年前からされている壁下地の造りかたであることがわかる。

¹² 遊佐町八日町住の高橋石雄氏の教示による。

¹³ 台輪軒への改造は和釘仕事で、明治前期以前の改造と考えられる。

〔2002年10月17日原稿受理 2003年2月25日採用決定〕